

特別支援学校における主体的・対話的で深い学びに関する調査研究（3年次）

大分県教育センター特別支援教育部

指導主事 伊達 洋介

I 前年度の研究結果から

令和元年度に、主体的・対話的で深い学びについて、県内の県立特別支援学校で実際にどのような実践が行われているのか現状と課題について調査を行った。結果として、①「深い学びの実現」②「教科別の指導実践の充実」③「重度の児童生徒の対話的な学びの実現」が必項の取組であることがわかった。そこで、令和2年度は協力校と連携して課題に沿った授業実践を行った。令和2年度の取組では、「対象児童生徒の的確な実態把握と主体的・対話的で深い学びの姿を明確化した授業改善」「児童生徒が自分事として取り組みたいような内容設定と周りの人と対話したくなるような展開の工夫」「教科固有の見方・考え方を重視しながらも生活への汎化を意識した授業実践」の3点が重要であることが明確になった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から学校訪問の時期と回数を制限したことで、十分な数の事例を集積することができなかった。そこで3年目は中学部と高等部の単一障がいのクラスを対象に、①「深い学びの実現」と②「教科別の指導実践の充実」に焦点化して研究協力校で授業実践を行い、その実践例を集積し、県内の県立特別支援学校に共有化することとした。

II 授業改善に向けての教育センターの支援

A校3名、B校3名、C校1名の教員に趣旨説明を行い、事前に電話やメールを通して、授業構築の助言を行った。1回目の提案授業後に助言を行うとともに、授業者アンケートで振り返りを行い、それを基に改めて助言を行った。これらを通して授業における工夫や改善点を明らかにし2回目の授業を実施した。

今回は7名の中から上記①②の2つの課題解決を試みた2事例を紹介する。

III 研究の実際

1 A校の実践（高等部 単一障がい 1年生 数学）

1回目では、分数を題材に授業を行った。その際、折り紙を用いて視覚的にわかりやすくしたいという意図はあったが、折り紙を折ることに時間がかかり、思考する時間を十分確保することができていなかった。また生徒同士で教え合う場面はあったが、対象生徒が理解するまでには至らなかった。そこで、1回目の授業後及び2回目の題材計画設定時に以下の指導助言を行った。

- (ア) 内容を焦点化し、その時間での主発問を精選し、生徒同士で思考する場面を設定する。
- (イ) 見通しを持ち主体的に取り組めるように、今までの学びを生かして、本時の問いを解くことができる内容にする。
- (ウ) 生徒の思考を優先し、教師の支援を最小限にする。生徒たちが試行錯誤し、話し合いながら答えを導き出せるような手立てを用意する。

大分県教育センター特別支援教育部

(ア)～(ウ)を踏まえて改善を図ったA校の2回目の授業実践を紹介する。

- (1) 題材名 「平面図形や立体図形の特徴を知ったり、面積を求めたりしよう」
- (2) 題材目標 (知・技) 平面図形の特徴や性質を理解し、三角形や平行四辺形の面積を工夫して求めたり、公式を用いて求めたりすることができる。
(思・判・表) 立体図形の特徴や構成する要素に着目し、立体図形を平面上で表現したり、図形の特徴を捉えたりすることができる。
(学・人) 日常生活の中に用いられている図形に気付いたり、その面積を求めたりすることができる。
- (3) 本時の目標 三角形の面積を工夫して求める過程で、直角三角形は長方形の半分ということに気づき、公式を導き出して、面積を求めることができる。
- (4) 展開 **※教師が意図的に改善した点を太字にして追加記入**

学習活動	○教師の支援 ・指導上の留意点
1. 本時の内容を確認する。(導入)	○前時の振り返りと今日の授業内容を伝える。 改善：前時の学びが本時の学びにつながっていることが意識できるようにした。 ・前時のワークシートを振り返り、前時でどんな学習をしたか問う。 ・見通しを持って学習に取り組むことができるように、スライドで流れを示した後、ホワイトボードに今日の授業内容を示し、生徒の言葉で確認する。 ・1次で作った図形を提示し、面積を求める際のヒントになるようにする。
2. 長方形、平行四辺形の面積の求め方を復習する。	○長方形、平行四辺形の面積の求め方を復習する。 改善：求め方を提示せずに、問題を提示することで面積の求め方を復習した。 ・形は違う同じ面積の四角形(64 cm ²)を2つ提示し、どちらの面積が大きいかを生徒に問い、面積を求めて比べてみる。 ・前時で平行四辺形の面積を求める際に、平行四辺形の一部を直角三角形と見て、移動させて、長方形にして面積を求めたことを確認する。 ○本時のめあてを伝え、視覚的にわかりやすいようにホワイトボードに提示する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">めあて：直角三角形の面積を工夫して求めよう</div>
3. 直角三角形の面積の求め方を考える。(考察)	○直角三角形を提示し、どのようにして面積を求めたらよいか考えさせる。 改善：対話を通して思考が生まれるようにペア活動を行い、公式は示さず、タイミングを見てポイントとなる点を示した。 ・面積を求める直角三角形を提示し、どのように面積を求めたらよいかを考えさせる。 ・友だちとペアになって考えるように促す。 ・ポイントとして、これまで学習してきた正方形、長方形、平行四辺形の面積の求め方を生かすように伝える。 ・難しい様子が見られた時には、ポイントを確認するように促し、方眼マツトに直角三角形を置いて、底辺や高さに気付くことができるようにする。

特別支援学校における主体的・対話的で深い学びに関する研究

4. 直角三角形の面積を求めて発表する。 (発展)	○導き出した直角三角形の面積を発表する。 改善：ペアで出した求め方を発表する機会を設け、他のペアとの違いを比較するようにした。 ・どのようにして面積を求めたかをペアごとに発表する。 ・気付いたことがあれば発表するように促す。 ・直角三角形の面積は <u>長方形の面積の半分</u> で求められることを確認する。
5. 本時のまとめと振り返りをする。(終末)	○振り返りシートに自己評価を記入するように促す。 ・個別に教師とやり取りをする中で、わかったことを聞く。 ・できたことを教師が具体的に言語化し、大いに認める。

(5) A校での実践の総括

3つの助言から教師は「生徒が自ら考えて解きたくなる主体的な学び」「生徒同士で協力し合いながら取り組む対話的な学び」「生徒が今までの学びで得た知識を用いて、試行錯誤しながら答えを見つけ出すことができる深い学び」を設定し、2回目の授業を実践した。2回目の授業では、直角三角形の面積を、公式を用いず、前題材の分数や前時まで学習した四角形の面積の求め方といった既存の知識を用いることで答えを導き出そうとする内容となった。対象生徒は、全ての辺の長さを測りながら、どのように解けばよいか悩む姿が見られた。そこで教師は長方形を示し、気がつく点がないかを尋ねることで、直角三角形は長方形の半分であるということに気がついた。そこから長方形の面積を2で割ればよいという思考に到達することができた。授業後、対象生徒は「こんなに頭を使った授業は初めてだったけど、答えが出せて本当に嬉しかった」と発言していた。既存の知識を活用し、試行錯誤しながら答えにたどり着くという深い学びにつながる授業となった。

2 B校での実践 (中学部 単一障がい 3年 国語)

1回目では、電話の応対を題材にメモを取る授業を行った。電話でお店を予約したいという対象生徒の願いに沿ったものであったが、内容が多く、思考する時間や振り返りの時間を確保することができなかった。また、教師の問いに答える場面はあったが、生徒同士で対話し、思考する場面が見られず、めあての達成に至らなかった。そこで、1回目の授業後及び2回目の題材計画設定時に以下の指導助言を行った。

- (ア) めあての意味を生徒が理解できるように生徒の言葉で前時の振り返りを行うようにする。
- (イ) 内容を焦点化し、何のための学習なのかを明確化し、生徒同士の対話を通して、自分にとって使いやすいメモ用のシートを作成するにはどうすればよいかを思考できるようにする。
- (ウ) なぜそう考えたのかという問いかけで、生徒の思考を深めるようにする。

(ア)～(ウ)を踏まえて改善を図ったB校の2回目の授業実践を紹介する。

- (1) 題材名 「電話で話そう ～受ける・会話をする～」
- (2) 題材目標 (知・技) メモを取るときに、要点を短く書き留め、相手にわかるようにまとめる。
 (思・判・表) 身近な人への電話があり不在の場合、メモに残す・かけ直しがある・折り返しかけるの中から、状況に応じて対応する。

大分県教育センター特別支援教育部

(学・人) 友だちのメモの記録やメモをする様子を見て、よい所を取り入れ、素早く正確なメモを作成するためのスキルを見つけようとする。

- (3) 本時の目標
- ・『電話受け取りお助けシート』(以下お助けシート)を基にやりとりをする中で、応対できるかできないかの判断をすることができる。(思・判・表)
 - ・友だちと考えを出し合い、よりよいシートに改善しようとする。(学・人)

(4) 展開 **※教師が意図的に改善した点を太字にして追加記入**

学習活動	○教師の支援 ・指導上の留意点
1. 前時までの学習を振り返り、本時の学習内容を知る。(導入)	<p>○電話の受け方やメモの取り方について振り返る。</p> <p>改善：めあてを理解できるように、生徒の言葉で前時の振り返りを行うようにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「電話を受け取る時に大事なことはなにがあったかな」、「メモ名人になるためにどのようなメモの取り方をすればよかったのかな」と問いかける。 <p>○本時の学習内容を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時に作成した『電話受け取りお助けシート』(以下お助けシート)を基に、対面で実践してみようことを伝える。
2. 「電話受け取りお助けシート」を基に、やりとりをしながら必要に応じて修正し、完成させていく。(展開)	<p>○作成した『お助けシート』を基に、教師とやりとりする。</p> <p>改善：ロールプレイを通して、実際の場面を想定し、お助けシートが具体的に使えるものなのか確認できるようにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつやりとりをし、『お助けシート』を基に電話応対できるか、できないかを考えられるようにする。 ・応対している生徒は、実践してみてどうだったか、側で見ている生徒は、自分ならばどうするかという視点で考えるように伝える。 ・自分の『お助けシート』は、自由に書き込みをしてよいことを伝える。 ・応対している生徒の言葉が出なくなった場合は、なぜ困ったのかを話し合う時間を設け、『お助けシート』に方策を書き込むよう促す。 ・『お助けシート』のどこに書いてよいかわからない場合は、「どこにこの項目が入るのかな」と問い、他の生徒の意見を聞きながら完成できるようにする。 <p>※やりとりを通し『お助けシート』を自分が使いやすいものにしていく。</p>
3. 「電話受け取りお助けシート」を友だち同士で見合う。(発展)	<p>○友だち同士で作成した『お助けシート』を相互に見合う。</p> <p>改善：対話を通して自分にとって更に使いやすいお助けシートにするにはの視点で思考するようにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電話で応対した際に困りがなかったことでも、友だちの『お助けシート』を見て、「こっちのほうがわかりやすい」などの視点を持ち、自分のシートに修正を加える時間を設ける。 ・自分が使いやすい『お助けシート』になればよいことを伝える。
4. 本時の学習を振り返る。(終末)	<p>○本時の学習内容を振り返る。</p> <p>改善：なぜこのようなシートにしたのかを言語化する機会を設けるようにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・完成した『お助けシート』と、授業前の『お助けシート』を見比べ、より使いやすい

特別支援学校における主体的・対話的で深い学びに関する研究

	いシートが完成したことを確認するようにする。 ・『お助けシート』の見方を再度確認し、次回はシートを活用して電話を受ける学習に挑戦することを伝え、本時を終了する。
--	---

(5) B校での実践の総括

3つの助言から教師は「自分事として取組みたくなる主体的な学び」「ペア活動等を通して違いに気づき、自分ならばの視点で思考する対話的な学び」「自分にとって使いやすいシートにするにはどうすればよいかを試行錯誤しながら見つけ出す深い学び」を設定し、2回目の授業を実践した。2回目の授業では、自分にとって必要なお助けシートを作成し、電話の応対をすることができるようになってほしいという教師の意図が明確であった。前時の振り返りを生徒たちの言葉で行うことで、めあてを意識し、自分事として取り組む姿が見られた。また、ロールプレイを行うことで「その言い方は伝わりやすい」「そのまま書いていたら時間がかかるから省略して書いた方がいい」等、生徒たちから積極的に意見が出ていた。そして、ペアになり、自分のお助けシートを見せ合うことで、「それは書いてなかったから、真似していい？」と友だちの意見を参考にする場面があった。授業後、「自分で作ったお助けシートがあることで、電話の応対ができるようになり、次の授業が楽しみ」という発言があった。友だちの意見も参考にしながら、試行錯誤してシートを作り上げ、それを利用することで電話の応対ができるようになることを実感できる深い学びの授業となった。

IV 成果と課題

A校では数学の授業を通して、B校では国語の授業を通して、課題①と②の解決に向けた実践を行った。授業者は、主体的・対話的で深い学びの授業実践を行う上で、この題材の深い学びとは何か、生徒たちがどのような発言や表現ができれば深い学びに到達したと言えるのかを考えた。また深い学びのためには、どうしたら生徒が主体的に取り組むのか、対話を通して思考するのかを考えた。2回の授業を通して、授業者は、「学習の意義を見出し自分事として取組みたくなるような内容にすること」「対話を通して思考を深めるような展開を工夫すること」「既存の知識を活用して試行錯誤しながら自分にとっての答えを導き出そうとすること」等が重要であると気付いていった。

1回目の授業から問題点を明らかにし、改善の視点を踏まえて授業を構築する方法は、授業者に指導と評価の一体化を意識させ、授業改善のPDCAを実感させる上で有効であった。また、中学部と高等部の単一障がいクラスに限定して行うことで、「学習の意義を理解すること」「自分から考えたいような内容にするといった内発的動機付けを意識した授業構築の重要性」「既存の知識を活用して問題を解けるようにするにはといった題材構想の工夫の重要性」に気付いていった。

今回の調査研究を通して、特別支援学校における主体的・対話的で深い学びの授業実践には、「児童生徒にとっての必要感を重視し、各自の活動を確保する個別化」「知的障がいの特性を考慮し、1時間の中で解決する問題は一つに絞るといった内容の焦点化」「解き方を教えるのではなく、どうしたら解けるのかという思考の場面を設けるとともに、思考を補助する支援の具体化」が求められることがわかった。

また、実践を校内で共有することで、その中で主体的・対話的で深い学びの視点を明確にした授業実践が見られるなどの変容が確認できた。これらのことを踏まえ、特別支援学校における主体的・対話的で深い学びの授業改善の参考になるよう、教育センターのホームページに2年間の取組をまとめた実践事例集を掲載し、活用できるようにした。